

# 「芸術」の語源考

五十嵐 嘉 晴

## 序

絵、彫刻、音楽、文芸などは、古来より存在した。しかし、それらに対して用いられる「芸術」という語があらわれてくるのは、比較的新しい時代になってからである。その主たる理由は、諸々の芸術をまとめて「芸術」と言う、この概念の成立が近代になってからの事であるからと考えられる。

とはいえ、美術、音楽、文学などに共通の性質がある事は、かなり古代より考察されていた。古代ギリシャの文献の中にも、いくつものその例をあげる事が出来る。さらに言えば、芸術が人間の他の活動や技術や宗教などと未分化である時には、当然の事ながら、芸術と他の分野の間、ならびに芸術の諸分野の間にも、共通の意図や性質が存在する。この事態は、原始時代に見られるし、今日なお一部でそうになっている。しかしこの場合には、この未分化の共通性のため、「芸術」という観念は無いか弱いかであり芸術への志向より、むしろ諸芸術への分化の方向に進んで行った事は、歴史の上であらわれている事実である。

ある辞書によって、〈芸〉という字についてその原義である「植える、種く」という意味を別にして、「身に学び得たるわざ」と理解しても、さらに〈わざ〉や〈術〉を「たくみ、する事、しごと、はたらき」と説明しても、さらには〈たくみ〉を「いとなむ、工夫す」と知っても、芸術の特殊な性格は、未だ何も明らかにされない。この種の解釈では、なお原始時代の芸術の程度以前、すなわち人間の芸術発生以前の説明とさえ言え、従って恐らく芸術を特徴づけていない事と同じである。こうしたところで、〈芸〉、〈術〉、〈業〉、〈芸術〉、〈工〉、〈美〉等々をめぐって、美学ないし芸術学による解明が必要とされる所以もある。

美学の必要や存在理由は、何もこれだけの事由に限られるものではないが、ここでは、例えば、辞書を引いても良く解らぬ故にとか、辞典を一層完全なものに今後して行くという意味でも、芸術理論の深化が必要な事を、単に指摘したまでの事である。しかしながら本稿は、辞典に抛りながら、そこに出てくる言語学者の研究に頼りながら、芸術とそれに関連する幾つかの語義について、若干の考察をする事を目的とした。

ところで、初めに言った「芸術」という近代的概念の成立と言っても、実状はそう簡単に片づけられるものではない。今日なお、芸術の概念は固定的に確立されたものではなく、多様な定義があって、むしろ、時代的に生成され発展されて行くものと考えられる。すなわち、近代になって、「芸術」という統一的概念が強化されていると言う事は、ウエイドレ氏〔『ミーメーシス言語活動』第一章(『比較芸術学研究』第五集、美術出版社刊に収録)〕などと共に認める事が出来るが、その近代の歴史の中で、芸術諸分野(ジャンル)間に、かえってそれぞれのジャンルの独自性を進めるあまり、他のジャンルと敵対したりなどして、そこから進んで、「芸術」という概念から脱して行かんとするものもあつたり、さらには、前時期の芸術を否定して進むところにむしろ「芸術」があるとする考え方などがあり、芸術概念が混乱を呈しているのは事実である。しかしながら、芸術の伝統と普及はほぼ人類の発生以来連綿としていて、古今の野蛮人や非文化人にも、人間である限り少なくとも幾許かの芸術感覚は存在し、芸術は、豊に我々を取り囲むか、あるいは芸術に対する我々の要求は強く、芸術は重く且つ軽く我々に覆いかかり、芸術の発生より続く性格を守ちながら、その中での分化は分化とし、対立は対立としながらも、他の文化や人間生活との接触を通じて

歴史の中で、一層の発展と、その本質の豊富化と高度化に向かっていると、筆者は考える。この時、常に、その経て来た道を振り返り、その輝きに打たれながら、今後の進路への参考や批判として行く事は、人間の業である。美学は、もとより、これらの事に関して原理的解明を試みんとするものであるが、本稿では、その側面に於ける研究として、〈芸術〉という言葉などの語源や歴史の一部を調査する事に於ける幾つかの着目を提出するにとどまる。〔なお、印刷の都合を考えて、かなりの文字を略字としたり転記したり、割愛せざるを得ない。〕

## Ⅰ 日本と中国の場合

日本に於いては、〈芸術〉という語は、8世紀末に編纂された『続日本紀』の中で、8世紀初めの記事にすでに出て来ている。〔大宝三年十月甲戌「本姓金……頗涉芸術」〕。それは、学芸と技術の意味を持っていた。その後江戸時代になっても〈芸術〉は、学芸と技術の意味で用いられていた。〔滑稽本、風来六部集——飛んだ噂の評；読本・椿説弓張月——前・一回；等〕。

しかし明治5年頃には、西周が、詩、音楽、画、彫刻、書などを〈雅芸〉(Liberal Arts)とその『美妙学説』の中で呼んでいる。また彼は、画学(ペインティング)、彫像術(スカルプチュール)、彫刻術(エングレーキング)、工匠術(アルキテクト)と共に、詩歌、散文、音楽、書を〈美術〉とその類としているが、『人智論』では〈芸術〉という語で、「文章、書画等百般の技術」を指している。西周がこの様な言葉づかいを出来る土壌は、明治初期にすでに日本で形成されていたのであろうが、彼の場合は、主として彼の西洋教養が〈芸術〉という語を近代的意義で使用させしめたものと言える。次いで中江兆民の訳による『維氏美学』(明治16年刊)では、フランス語のl'artは、〈伎術〉〈伎巧〉とされると共に、〈芸術〉の語も見出される。〔この間の美学の事情については、山本正男教授の論文『明治時代の美学思想』を参照されたい。〕明治38年の上田敏の『海潮音』

や夏目漱石の『吾輩は猫である』の中では、ほぼ今日の意味での芸術の語が一般に用いられている。

しかし伊沢修二が、『教育学』(明治15年刊)の中で芸術という語を使用して、それに未だ古い意味を担わせている。〔三・二「此諸種の武芸練習によりて、強壯なる体格を造成したるもの甚多しとす。然して此等の芸術は、体育の法に於て各異なる所あり」〕。また明治中期に、重野安繹が佐久間象山碑に、「東洋道德、西洋芸術」という文句を入れた時にも、芸術は未だ学術の意味であった。〔象山自身の遺墨には、「東洋道德、西洋芸」となっている。〕

古代中国では、〈芸術〉は学問と技術を意味し、特に卜祝筮匠の技を言った。『芸術伝』という書物も、今日の芸術ではなく、この意味を持った列伝である。〔本稿での漢字の歴史と語義に関しては、その殆んどは諸橋轍次博士の御仕事の引用を出ない。なお、韓国美学会誌『美学』第2輯の白琪洙氏の論文『The Basic Concept of Aesthetics (Ⅱ)』も参考となった。〕

〈芸人〉は、後になって、今日で言う芸人や職人の意味を持つが、もとは「道德・学芸にすぐれた臣」や「卜祝筮匠の技を執って上に事へるもの」であった。この者は、〈匠〉であるから、職工の様に身分は低い筈であるが、国運を占い、あるいは〈臣〉として政府要人たる〈芸人〉の特徴は、エトルリアの占い、ガリアのドルイッド(僧)など、民族の運命に重要な決定を与える者を想わせるが、この事はさらにまたアイルランドで詩人が、かなり後の時代まで重要な政府メンバーであった事まで起想させる。アイルランドの詩人の場合は、恐らく易者の性質より、歴史家と法学者の性格の方が強かったのであろうが、中国では〈芸人〉は、易者と学者とに分かれたのか、易者から学者者に進展したのかは良く解らない。

〈芸〉という漢字の元の字は、「植える、種く」、「わざ、才能、学術」以外に、「きはまり、さだめ」の意味を持つようになっている。この「さだめ、のり」は、ギリシャで言う〈カノン〉(規)と直接も間接も関係はないが、

カノンも元来は、葦の茎や棒を指していたもので、やがて尺度となっていった。漢字の芸も草かんむりを保持しているが、どの様にして、易や学術、さらに規定に転意していったかについての事情は、良く推察出来ない。白氏は、〈芸〉は、Plantingから収穫を目的とし、Cultivation of human character by the six-arts への移転を考えている様である〔前掲書〕。

この事に関して注釈すれば、中国で〈芸〉は礼楽射御書数の「六芸」、あるいは又は、易詩書礼楽春秋の「六経」をも指したという事である。西洋中世で有名な「自由七芸」は、学校の七主要教科であり、文法、修辞学、弁証法、算術、幾何学、音楽、天文学であった。東西の教育の基本となった教養と科目の比較検討は、これらの限りでは、時代や比較内容と条件に差異があり、困難であるが、ともかくもかなりの共通が見られる。芸術に関して言えば、東西において共に、文学と音楽が重要で必要と考えられていたし、やはり美術はこの時点では、教科目とも高級な芸とも倣されてはいない。ただ東洋では、六芸の中の書が、西洋で言うメカニカル・アート（職人技）以上の重要性を獲得している事が、ここでも再確認される。勿論それにとどまらず、東洋では西洋以上に、詩と美術は融合し、やがて高貴な人も画にたずさわる事実があるが、芸や芸術という語の上に、この事は我々の時代に近づくまで反映されないで終わった。西洋でも詩や文学と美術の結びつきは強かったが、東洋におけると同様に、美術が芸術のランクに昇格するのは近代になってからの事であり、それも意識的にその絆の強調が行われて、近代的芸術概念の成立の過程の中で可能となったものである。

漢字の〈術〉は、当初は村の「道」を意味していたが、「心のよるところ」、「のり、おきて」、「てだて」、「わざ」、「しごと」、「はかりごと」などの意味も帯びる様になった。〈わざ〉が〈道〉であったという事について、直接に哲学的連関をつける訳には行かぬであろうが、〈わざ〉と〈道〉には、「てだて、方策」をつける事の意識が宿っていると考えられる。

この事は、〈技〉という語が、「たくみ、わざ、ちから、方術、工人、はかる」などを意味していた事と思えば、次の指摘が出来よう。〈たくむ（工む）〉とは、「手（た）組む；即ち、手を組み、て 思案する義」であって、「いとなむ、工夫す、企つ、経営す」、又は「たくらむ」事であるから、工人も職人も、物のおきてを思案しながら工夫する者であるという事である。曾てとは逆に今日、芸術家が職人を志向する傾向も見られるが、この時、〈たくみ〉のこの元来の意義を忘れるべきではないであろう。さらに言えば、歴史的には、芸術家は職人を芸術的に凌駕する資質を獲得して形成されて来たものであるから、芸術家が職人に帰らんとする時は、この歴史的に豊かになった芸術家を乗り越える気概さえ求められるものと言えよう。

〈芸術〉に関しては、これらの考察以外に、西洋でもミーメシスや「模倣」の言葉と概念についての考究が芸術の本質を開示するものとして議論される事や、東洋でも「伝神写照」などとして重視されているものへの顧慮から、〈うつし〉、〈まねする〉、〈にる〉、〈なぞる〉、〈そう〉、さらに〈あわれ〉等という語それらに対応する副、写、描、摸、現、表、状呈、文……というこの種の数十個の字をめぐっての追求への観点も考えられる。しかし、このテーマは他日に譲る事とする。

## Ⅱ 西洋の場合

西洋に於ける芸術の語源とその語の歴史については、トウルリオ・デ・マウロ氏の研究調査を主に参考とし、それに沿いながら次の考察が行える〔Tullio de Mauro, Art の項 in 『Encyclopedia of World Art』 Mc Graw Hill〕。

古代ギリシャで芸術は、mīmētikai technai（模倣諸技術）などと言われた。今日のテクニクの語源である technē は、teksnā に由来しその語幹「テキ（ク）ス tek」は、「作業する、編む」の意味を始源に持っていて、特に「編み組みして作る家屋の木工物を連結する」ことを指していたと考えられる。同じ語源によ

る tektōn は、大工、木工、職人に対して用いられる。tekmar (標識) も、同じ語幹から来ているらしい。このインド・ヨーロッパ語幹で作られている、古代インドのサンスクリット語の taksan も大工を意味した。同語源のラテン語の texo (texere) も、「織る、編む、建造する」の意味であり、これは今日の英語のテクスタイル (織物) まで続いて来ている。

Technē の意味するものは、まず、仕上げる能力、手腕、特に、金属や木材を加工し建造する手仕事のそれであった。このテクネーと意味の近い語に、mēchanē がある。この語は、「巧みな工夫、機械仕掛、想像・発明の才、術」を意味した。テクネーもメーカーと同じく、技倆に限らず、技倆による産物、作品を指したしそして又は、魔術を意味する事もある。テクネーと語源的関係はないが、プラトーンが美のエロースを説いて、これが狂気 (mania) の一種であり、神のマニアは、古語であるマニケー (manikē 狂気の術) と同じ語源であり、予言術 (mantikē) と同類で、鳥占術よりは美しいとしている [パイドロス、244] のを考えると美や芸術の語の周辺に、中国と同じく、魔法や易があった事が知られる。

同じくプラトーンによれば、テクネーは天賦の才ではなく、習い覚えたもので、学習の結果 [プロタゴラス、312、328、357]、ヘーロドトスは知識の対象であると考えていたらしい。またテクネーは、ある活動の規則、学理をも意味する様になり、特に文法や修辭学の掟や学説を指した。テクネーの諸概念の一応の整理は、プラトーンが『ソフィスト』で行った。テクネーの以上の様な諸々の意味を見ると、中国における〈芸〉の字の発生とは異なっている、ほぼ同じ様な方向に発展して行った事が解かる。

ラテン語にもギリシヤ語から来た techna の語は存在したが、同義の ars の方が一般に用いられた。Ars は、インド・ヨーロッパ語の語幹 ar- の周辺から来ている。Ar- は、多様な意味と発展を持つ語幹であるが、我々の追求している語源では、「ある特定のあり方、やり方」を意味したものであろう。この ar- について、

ポコルニー氏は、「組合わせ、整え、適合す」の意味を見て、古来は木造建築における整然たる重ね合わせ、材木の堆積で恐らくあったろうし、しばしば精神上的の整頓の意に転じられると推定している。[Julius Pokorny : Indogermanisches etymologisches Wörterbuch]。たしかに、artus というラテン語の形容詞は、「くっついた」の意味を持っている。こうした事情の中で、アルスは、語幹の異なるテクネーと「木工作による」という類似の状況と意味を、古くは共に持っていた事になる。

同じ語幹から来るサンスクリット語のリティ (ハ) [ṛtīh] は、「手法、やり方」を意味し、ギリシヤ語の arti は「丁度良く」、artios は「全く良くでき、かなっている」、artizein は「準備、調整する」、artyein、artynein は「整備、準備する」、リトワニア語の artì も「近い」の意味であり、これら全て、原初の語幹の意味に関係した語義を守っているものである。

Ars は、遅くとも前2世紀の末には「技倆」や「策略」の意味で用いられる事になったし、やがてテクネーと同じく、学術規則、技術、職業的技能の意味も備わった。こうした〈技〉の意味が、artes ingenuae 又は liberales (自由身分人の為す高尚な技) と artes sordidae (手工の賤技) との区別を伴って、古代ローマより中世ヨーロッパ世界に一般化した。このアルスのトップレベルに、自由七学科 (septem artes liberales) が認められた。技術や手工を意味する ars は、中世では、その複数形 artes が「工匠の諸協会」 (societates mesteriorum) を、artista はこの協会員を指す事もあった。

ロマン語系言語では、長くこのラテン語の意味が受けつがれていた。例えばスペインでは、1144年まで遡って見い出される el arte の語は19世紀になっても古い意味を担っていた。フランス語の場合を、リトレ辞典 [Littré] や最近の『フランス語 宝典』 [Trésor de la Langue Francaise, Dictionnaire de la langue du 19<sup>e</sup> et du 20<sup>e</sup> siècle, édité par le C.N.R.S., publié sous la direction de Paul Imbs, chez Klincksieck] によってみると、以下の如くの調査が行われている。

① 1165～70年頃に、例えば "les granz livres des set arz" という語句があるが、複数形で用いられて、arz は明らかに自由学科を指していた。同時期には単数形で art も勿論見られ、16世紀まではなお女性名詞ともされていた。Art は一般に「ある事にいたる手段、手だて」の意味であった。16世紀の文例 "certaines tables, ou estoit escrete l'art d'exposer les signifianges des songes" (夢の意味を示す決まりの書かれた表) では、art は、「活動をうまく行う仕方、方法、科目に適した規定」という内容を持っていた。14世紀の文例 "il entent par art science pratique, et par doctrine science speculative" (彼は art を実用知識、ドクトリンを思弁的学識と理解している) に見られる様に、art は自由学科にはなり得ても、それ以上の観念的体系のものには考えられない。そして「手業、職業、具体的活動」の意味がつきまどっていた。この例では、13世紀初めにの "quiert poissons, c'est li ars dont il vit" (魚をとり、それが彼の生きる仕事) という文などがある。これら全て、ラテン語のarsにもあった意味である。

② 秘術の様な意味を持つ場合として、12世紀の初めの例で "males arz" (悪の技) という言葉がある。〔『ローランの歌』71〕。これは「魔術、神秘学」を意味している。古典ラテン語の場合の malae artes は、bonae artes(良き徳質)に対して、「悪い性質、悪業」を意味し、道徳的価値を示す言葉であった。しかしラテン語の ars も魔術として用いられなかった訳でもなく、テクネーも担ったこの意味が、中世フランス語にも続いている。12世紀以来見られる "Grand art" (大いなる技) も、15世紀末に "maulvaiz arts" (悪い技) も、同様に「魔法」の意味である。しかし16世紀初めに、ルメール・ド・ベルジュ (Lemaire de Belges) が、嘗て君主達は l'art Magique を学んだと言い、それは三つの主要な学、即ち宗教と医学と天文学を含んでいたとしているが、ここではもはや、妖術の雰囲気は消えている。

③ ラテン語の ars に従って、フランス語の art が技術や技巧の意味である事は、例えば17世紀

には殆んどそうであったし、フランス語の全時期にわたっている。ところで、16世紀末年の例にモンテーニュの言として取り出されている "si j' estois du mestier, je naturaliserois l'art, autant comme ils artialisent la nature" (もし私が技職の者なら、彼等が自然を人工化すると同じ程に、私は人工を自然化するであろう) というのがある。ここで art は、人間活動の産物であり、自然に対置せられた人工的なものという意味である。この意味も古代から ars に備わったものであるが、これと共に、古代ローマのキケロ以来見出しされる〈芸術〉の意味も、わずかながら時々感じられない事もないが、それがはっきりして来るのは18世紀になってである。トレヴァーの1740年の辞典では、art に、美の特定の表現形式、そして結果が美的対象や美的作品となる活動という意識のある解釈も加わっている。〔Dictionnaires universel francois et latin, vulgairement appelé Dictionnaire de Trevoux〕。

Beaux-arts (美術) の語も、16世紀から使用例が見られ、18世紀にはかなり普通に用いられるようになり、1752年にはラコンブが『美術辞典』を公刊する〔La Combe : Dictionnaire des Beaux-Arts〕。この中で次の定義が見られる。

「美術は、単に技術 (Arts) と言うものと區別される。後者は、有用性のものであり、前者は楽しみのためのものである。美術は天賦の才の子である。美術は自然をモデルとし、趣味を師とし、快を目的とする。」こうして美術は美的表現の追求があらわれる活動と作品の総体として、当時の言葉で考えられているのである。この〈美術〉の語と意味が、art の語と定義に照り返す中で、art = 芸術の意味が19世紀に一般的に作られる事となった。

『フランス語宝典』のスタッフの分析によれば、今日 art は、「思考力なく生成する力として考えられた自然に対峙し、応用からはなれた純粹な認識として考えられた科学に対峙し」〔A. Lalande : Vocabulaire technique et critique de la philosophie の考えを援用している〕ているもので、「人間がある目的に達し、ある結果を得ようとする時の意識的な手段、手続きの総体」

と考えられている。そして、その諸々の個別的にな意味と使用が提出され整理されている。そこには art の古来よりの意味と、芸術の色々な局面を指す語義が示されている。その詳細な検討は、語源考をしている我々の範囲をかなり越えるので、そこに立ち入らぬ事とするが、全体として見れば、自然と学に結びついて生まれた art は、今日では、そこからはっきり分化し、対立するものとさえ意識されている事が解かる。それは、art が自然と結びついてと言っても、その際に自然に沿いながらもやはり自然に人間（もう一つの自然であるとしても）が加わって、高度に反省や判断の能力のあるものに備わったものとしての art が人間なしの自然と対面する以上、そしてまた、art は 学の中にあっても 科学や技術と共通しながらも異なった種を宿していた以上、当然の成行であると言えよう。しかしながら art はなお、自然と学に訣別をしたのではなく、それらと異なりながらも、それらとの関係の上には成立し得ないであると筆者は考える。しかしこの論究もまた、本稿のテーマ以上のものであるので、他日に期する事とする。

さて英語の Art の方は、ラテン語とフランス語から入って来ているので、それらと諸々の意味の上で大差は認められず、歴史的変遷の経過もフランス語のそれに大筋は準じている。技能の意味での Art は、すでに13世紀前半の例が見い出されている。芸術の意味では、17世紀はじめにすでに文芸に関して用いられ、美術に関しても17世紀後半から使用され、その後一般化に向かった。しかしこの意味での Art は、1880年以前の英語辞典には現れて来ない。またウエイドレ氏の指摘する様に、Art は、“Art and Architecture” や “Arts and Crafts” という表現の中では、特定のジャンルに限られて用いられている。[W.Weidlé : Vom Sinn der Mimesis, in Eranos Jahrbuch, 1960]。

Fine Art は、フランス語の beaux-arts の訳語として出来、従って、当初は複数形で用いられた。この用語は、1767年の文献にすでに出ている。Fine Art は、広義では、文芸や音楽なども含むが、絵、彫刻、建築の様な美術、乃至

は Art of design の意味として、狭義で用いられる場合の方が圧倒的に多い。

英語の Art の用法の詳細は、『Oxford English Dictionary』に於けるほぼ完全な調査以上を望むべくもないので、その参照に譲る。そこに見られる如くイギリスでの Art の語に於ける技術と芸術の概念は、少々の独特な用法を除いて大綱は、ラテン語以来の伝統とフランス語の影響下で成長展開されていると言える。

ドイツ語で芸術を指す Kunst は、動詞の können (古高地ドイツ語では kunnen、ゴート語では kunnan) より来ていて、この「出来る」を意味する können はまた、kennen (知る) も派出している。このインド・ヨーロッパ語の語幹は “ギナ<sup>gn̥</sup>” であり、「婦人」を意味するものの様である。ギリシャ語の gignōskō (習う、理解す) やラテン語の cognosco (習う、学ぶ、知る) も、この語幹に基づいている。Kunst は können とのつながりを、15~6世紀になっても意識していたと、グリムは言っている。[J. und W. Grimm : Deutsches Wörterbuch]。この様な由来事情から、Kunst は、「利発」という当初の意味を13世紀中葉まで持ち続けていたし、「知識—能力」というその附随的意味もこれに基いていて、一般化していった。従って Kunst は、中世ラテン語の scientia と ars の意味を共に含み得たのであって、実際1400年頃には、septem artes liberales は “siben fryen kunste” と訳された。今日でもなお、freie Künste は、文芸や美術を指すが、frei に特に「美的」という意味がないから、中世以来の語義の伝統によっているものと考えられる。

Art という語は、中世ドイツ語にも存在していたが、今日のドイツ語と同じく「仕方、様態」を意味していた。この語は、ars の語源として前述のインド・ヨーロッパ語に共通の原初的なその意味を存続させているものである。

List は、lehren や lernen から来ている。古・中世高地ドイツ語で List は、「智」を意味していて、「魔術や技術の才に巧みな事」をも指していた。この語はかように、テクネーやアルスと近い内容の語であったと言えるが、しだい

に悪い方の意味との結びつきが多くされ、今日  
そうである様な「奸智、奸計」の意味になるに  
いたった。それは同義の *Arglist* に見る様に、  
*arg* (悪い) に引きつられたからでもあろう。  
フランス語の *art* は、かつて悪い意味も帯びて  
いたのに <芸術> になれたのに対し、*List* は  
*Kunst* の様な榮譽ある言葉になれなかった。

*Kunst* は、16世紀よりは、手仕事や職業の意  
味よりしだいに、詩人、画家、彫刻家、音楽家  
の活動を指すようになり、やがて *bildende ku-*  
*nst* という語が出来るが、この語は *レッシング*  
がこれを用い論ずるまでには出現していた。こ  
の用語は、*レッシング* が行った様に、詩から区  
別されるものとしての可視的、形像的、造形的  
(英語で言えば、*visible, figurative, plastic*) な  
芸術のジャンルをまとめる語である。18世紀に  
出てくる *schöne Künste* の方は、手工や技術の  
意味の *Kunst* に対立して出てくる伝語の  
*beaux-arts* の訳である。[*Hermann Paul :  
Deutsches Wörterbuch*] 。

美術は、こうした用語の以前には、イタリア  
で16世紀に例えばヴァザーリ (*Vasari*) のもと  
では、“*ディセーニョ*の技術”と呼ばれていた。  
彼はこの用語に、工人芸よりは高尚な、知性的  
性格をこめていたのである。この *disegno* は、  
ラテン語の *signare* (印をつける、指し示す) に  
由来し、14世紀には、絵の下絵デッサンの意味  
で用いられた。この下準備が、中世の絵画の多  
くの一般における如く、伝統的な図像を写し、  
繰り返すものである時には、さして高尚なも  
のと強調されることもなかったが、ルネサンス  
に入って絵画の主題構想や内容表現に一層の創  
意工夫が求められる様になって、この準備段階  
も、大きな重要性を帯びるものとなる。そして  
ヴァザーリの時代に近づけば、このデッサンは  
個々の具体的技法やジャンルを越えて、その上  
位にあるべき美的な普遍的な理想の予示とし  
ての価値を持つにいたる。勿論中世に於いても、  
デッサンはジャンルの枠を越えた共通性を持  
っている事も多かったが、その事が特別に意識  
されるのは、ルネサンスの自由の中であつた。  
ヴァザーリは彼の『美術家列伝』のはじめの部分

に、シモニデスやホラティウスの格言をふま  
えて、「彫刻と絵画は(中略)姉妹であり、一つの  
父より生まれた。その父は*ディセーニョ*である」  
と言っている。*ディセーニョ*は、この時代の新  
プラトン主義的美意識の中では、“内的イメ  
ージ”であり、もともと*ディセーニョ*は、フラン  
ス語の *dessin* (デッサン) と *dessein* (意図) が  
文字の上でも意味の上でも混合して用いられて  
いた様に、この二つの意味を兼ねそなえてい  
た。フランスで *dessin* が *dessein* とはっきり区別  
された綴りとなるのは18世紀末のことである。  
[*Bloch et Wartburg : Dictionnaire de la langue  
française*] 。英語で言えば “*Art of design*” とい  
う考え方の中では、*Design* = *ディセーニョ* は  
構想であるから、芸術諸ジャンルの区分やそ  
のヒエラルキーはあまり重要でない筈とも考え  
られる。しかし現実には、自由な発想をより多  
く必要とするものと、そうでないものとの程度  
上の差異がジャンル間にあり、これにどれだけ  
知的であるとか、どれだけ実用的であるとかい  
う区別が加わって、大芸術と小芸術、あるいは  
純粋美術と応用美術などという区分の用語も出  
て来た。これら全て、アルスの持つ多義性と関  
連があり、実はアルスの多様な活動様相を何ら  
かの一定の見解で整理せんとしているものでは  
ある。

“美術”という言葉は、領域としては *Arts of  
design* と同じものをさすが、自然などの美を人  
工の中にあらわす人間精神の活動という意識か  
ら特に出て来ている。またそこに、『*Encyclo-*  
*pedia of World Art*』の *Art* の項目の執筆者が  
指摘する如く、芸術の純粹さ、カントの用語で  
は無関心性をも認める意識、また前述のラコン  
ブの定義する様に、快を望む意識が、含まれて  
いると考えられる。

美術に関して用いられるイタリア語の *arte  
figurativa* は、イタリア語に限らなく広まって  
いる。この用語は、今日では抽象美術に対して  
具象美術を指す意味が強いものとなっているが  
それ以外に、造形芸術の特質である可視形態性  
を良く経験的に指摘する言葉でもあるので、  
*bildende Kunst* と同様に、詩や音楽からの区別

を明瞭にするものである。この語の日本語訳は難しいが、例えば“視形象芸術”などが考えられる。

これと近い英語の Visual Art という今日の語については、“視覚芸術”という様な訳が当てられようが、その内容は、“眼で見る芸術”(Visible Art)という事では不十分で、「純粋に視的価値を持ったもの」としての芸術についての問題となるべきであるという指摘を、『Encyclopedia of World Art』の Art の項目の担当者がしている。しかしこれに対して本稿の筆者は Visual Art がその様な問題の追求から出て来た用語であるとしても、いわゆる“美術”は、“純粋に視的価値”の問題にとどまらない、深い背景と広い連関を持っているという指摘を附言だけしておきたい。この議論の展開もまた、本稿のテーマ外である。

ところで Kunst は、ヴィンケルマン、レッシング、ヘルダー、ゲーテなどの感性と思想と影響によって、18世紀末には近代の意味を徐々に備えるようになった。Kunst や Art が、アルス以来の主要な語義である「技術」から「芸術」に一般に中心を移して行くのは、ロマン主義思潮とドイツ観念論美学の普及の中で決定的に行われた。しかしすでにヴィコ (Vico) が、arte にこの近代の意味を持たせたのは、18世紀前半に於いてであった。ヴィコは大概の用語には旧守的な態度をみせているが、arte に関しては文字通り“新しい学”の意識であったり、孤立してはいたが、ロマン主義に先駆ける彼のロマン主義的歴史哲学がそうさせたものである。

しかしながら el arte を美術や芸術として用いる事へのスペインに於ける反論の例の如く [J. Corominas : Diccionario crítico etimológico de la lengua castellana]、19世紀にも一部に抵抗は続いた。1840年刊の『イタリア語同義語辞典』(N. Tommaseo : Nuovo dizionario dei sinonimi della lingua italiana) でも、arte の近代の意味は全くの端役にとどまっている。さらに、手仕事や実用活動としての art の意味は根強く残り勿論、格言などには古い意味が存続しているが今日新しい意味をもって諸芸術にふれる時に、

わずかなニュアンスの違いにもそれがあらわれる事がある。Art と言えば、芸術の中でも美術を特に指す事が多いのは、そこに一因がある。詩や音楽と Art は、なお言葉として区別されて用いられる場合が多いし、フロベールは、poète と artiste の区別を説きさえた [ルイズ・コレ宛の手紙、1852年7月6日]。クロチエが、arte は“操作的で形式的”な活動の観念を伝え表すとする時 [B. Croce : La poesia ; なおフランスの R. Bayer も、芸術美を“操作的レアリスム”の結実とした]、なお手の作業から来る観念の影が感じられる。しかしそこにはもはや、自由芸と賤芸の差別意識は完全に払拭されている。そしてむしろ、フォションの『手の礼讃』に見られる様な、手技の幸への芸術的感動が色々の問いを発させているのである。[H. Focillon : Eloge de la main, dans la Vie des Formes]。

### Ⅲ 芸術家

〈芸術〉が言葉として近代になってからのものであるからには、〈芸術家〉という語も遅れて作られたものである。日本語では、明治後期になってから一般的となっている。ヨーロッパで、先ずフランスにそれを見てみると、artiste の語はすでに中世から存在している。それは名詞としては、「職人」の意味であり、それ以外にも「錬金術や魔術や化学に携る人」を指したり、文学部 (faculté des Arts) の学生をそう呼んだりした。この意味は18世紀末までは存続していて、1771年の『トレヴーの辞典』や『フランス革命政府議録』の1794年の記載の中でも、そうになっている。この語義は、直接アルスから来ているもので、中世ラテン語の *artista* に基づく語である。Artiste は 形容詞としても用いられ、嘗ては、「巧妙な、技巧的な」の意味が一般的であった。

しかし、フランスでは、職人や芸術家を指す時には、*artisan* という語の方が、嘗ては一般に用いられていた。Artisan は、イタリア語の *artigiano* (職人) から出て来た語で、15世紀には「手仕事を行う者」の意味で用いられている。しかしこの者は、単に作業する者 (*ouvrier*)



とは異なって、arts mécaniques(自由科目と対立する概念でとらえられた手わざ仕事)と考えられる職を行う者という、その語源の意味を特殊な用法を別にすれば保ち続けている。[Littré]。美術工芸は、他の職工仕事とともに、この art mécanique に属するとも考えられていたが、高貴な技であるという主張が、近世になって次第に高まりつつあった。しかし artiste という語が、“芸術家”という意味を未だ持つに至らない期間にわたって、artisan が漠然と芸術家の意味でも用いられなければならなかった。16世紀の文例として『リトレ辞典』に収録されている “Peintre, poète ou aultre artisan” (画家、詩人、またはその他の芸術家)や “Si bien que la facture De l’artizan surmontoit la nature” (芸術家の作の手際が自然を凌駕した)に、その事を見る事が出来る。18世紀の初めにデュボスが詩人と画家を共に artisan と呼ぶ時、illustre という形容詞をつけくわえると良いと思った。

[J.-B. DuBos: Réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture, I, 1]。

17世紀後期の artiste の定義には、“Ouvrier qui travaille avec esprit et art” (精神と技とで働く職人) [P.Richelet: Dictionnaire françois...] とするのがあり、この精神を持ったという事にしだいに重い意味がかけられて行く様になる。そしてすでに1656年にその先例を見る辞典

[Bloch-Wartburg] もあるが、少なくともブリュノの指摘するように18世紀中頃には、artiste はラコンブによって画家、彫刻家、版画家など美術を行う人に対して当てられている。[F.Brunot: Histoire de la langue française des origines à 1900, t.6, p.682, n°4]。この時、美術は“自由技”とも言われる。Artiste の古い意味は、artisan の方の専用となった。フランス『アカデミーの辞書』では、1762年版に初めて artiste の新しい意味が登場する。こうした中には、職人から芸術家へ美術家が発展していった歴史的背景があり、その過程で、手仕事の賤しさの感じを持つ artisan より、artiste の語のリヴァイヴァルによって、音楽や詩なども含んで芸術全体を共通し、まとめる語として art、それに

携る人で、そのいずれにも適用出来る語として artiste が取り上げられた。

英語の Artisan や Artist は、フランス語やラテン語から入って、16世紀よりの使用例が知られている。フランス語のそれらと英語のそれらの意味の上でも、ほとんど共通性が見られるが、ただ英語の Artist の方がフランス語のそれよりも早くから、文芸や音楽関係の芸術家に対して用いられている様である。また歴史家や天文学者も、自由学科などの概念の延長上で、Artist と称される事もあった。

英語の Artiste は、Artist が今日では主として美術家を意味する場合が多いので、芸能人や美容師などを指すために、そして彼等が“芸術家”に連なる事を意識して、フランス語が再輸入されたものである。

Artisan の方は、(handi-) craftman の意味とほとんど重なってしまっている。英語にはまた Artificer という語もあるが、これはラテン語の artifex (職人、工人、芸術家)と無関係ではあり得ないが、直接には中世ラテン語の artificianus や古フランス語にあった artificien を祖としているもので、意味は Artist と Artisan の中間で、「Artisan よりも知性や良き趣味を要するが、創造力は Artist に劣る」[Webster's New International Dictionary]。

イタリアではダンテは、芸術や手仕事のいかなる分野の工人も、artista と呼んでいたから、芸術家と職人の意味が分離してくるのは、15世紀になってからであると、『Encyclopedia of World Art』の Art の項目の担当者は考えている。確かに、artista という語の中でこの事が明瞭に意識されて来るのは、そうであろう。しかし、「精神の活動としての芸術活動と工人の技術的活動との間の程度の差異」は、古代から意識にのぼっていた事である。しかしながら<芸術家>という言葉の出現がずっと遅れるのは、諸々の条件—芸術に対する実利的でも宗教的でもない態度の一般的確立、芸術家の社会的身分、芸術の統一的概念の成立などに左右されたからである。そして今後、<芸術家>という言葉が、どの様な充実をみせ、どの様な意味の豊富

化が行われ、どの様な変化をするかは、芸術家  
と天才と人類全体の共同作業の中で展開されて  
行く。